

南欧語南欧文学

◇教員◇

教授：浦一章

准教授：ロレンツォ・アマート

助教：長野徹

◇学生◇

学部：2名、修士課程：5名、博士課程：2名

(1) 南欧語南欧文学とは？

ここでいう「南欧語」とは、古代ローマ人のラテン語に端を発する、いわゆるロマンス諸語のうち、現在、イタリア、南フランス、イベリア半島（およびその延長としての中南米）を中心に用いられている諸言語の総称である。具体的にはイタリア語、スペイン語、ポルトガル語のほか、オック語（フランス語の方言にあらず）、カタルーニャ語（スペイン語の方言にあらず）、サルデーニャ語（イタリア語の方言にあらず）などがこれに含まれる。「南欧文学」は、これらの言葉によって作られた文学を指す。

といっても、南欧語南欧文学専修課程（以下、「南欧文学科」）では、今述べたすべての「南欧語」「南欧文学」が教育・研究の対象になっているわけではない。学科の主たる教育・研究の対象はイタリア語およびイタリア文学である。それは、本学科が1993年度まで「イタリア語イタリア文学専修課程」と称されていたことから察せられるだろう。本専修課程を卒業するためには、イタリア語の知識が必須である。

(2) イタリア語イタリア文学について

ここで、本学科で教育・研究の主たる対象となっている、イタリア語イタリア文学について説明を加えておこう。

イタリア語は、先ほど名前を挙げたロマンス諸語（上述の言語のほか、フランス語やルーマニア語も含まれる）のうち、ラテン語の故地で形成された言語だけあってラテン語の風格をよく保っている。イタリア語は、その最古文献の作成された年が西暦960年（モンテカッシーノ修道院の所領

地をめぐる裁判記録の中に見いだされる) と、フランス語の初出文献より120年ほど遅れるが、これは西欧中世の共通文語であったラテン語が、イタリア半島の文化にいかにも深く根づいていたかを物語るものであろう。

イタリア語を用いた文学作品は13世紀初頭より現われるが、同世紀末より14世紀にかけてダンテ(叙事詩)、ペトラルカ(抒情詩)、ボッカッチョ(散文)というイタリア文学史の最高峰をなす作家の輩出をみる。その背景に他の西欧諸国に先駆けてイタリアに興ったルネサンス運動のあったことはいうまでもない。トスカーナ地方出身のこれら三大作家の功績により、イタリア標準文語の実質的な形成が14世紀になされたことは特筆すべき事柄である。以後今日に至るまでイタリアの標準文語の基本的性格は大きくは変わっていない。

14世紀以後も、叙事詩(アリオスト等)、抒情詩(レオパルディ等)、劇詩(メタスタジオ等)、戯曲(ゴルドーニ等)、小説(マンゾーニ等)、批評(クローチェ等)、思想(ヴィーコ等)など、イタリア語を用いるあらゆるジャンルで活発な活動が展開されてきた。また、地方文化の多様性を特色とするイタリアでは、標準語と同じくラテン語から派生したとはいえ、標準語とは様相を異にする方言が全土で根強い生命を保っている。方言を用いた文学作品にもみるべきものが少なくない。

イタリア語は西ヨーロッパ文化圏において有数の豊饒さを誇る文学を生み出し、イタリア文学はその文化的先進性によって、他地域の文学に大きな影響を及ぼしてきた。このようなイタリア語イタリア文学でありながら、わが国における研究の歴史は残念ながら極めて浅い。これには明治以来、わが国で行なわれた西欧文化の受容の仕方が偏っていたという事情が介在している。現在でも、イタリア語イタリア文学を専門的に学べる学科を設けている大学は、本学を含めて、わが国では数校ほどしか存在しない。イタリア語イタリア文学を学ぶことは、近代西欧文化の根底に触れ、その行き届いた理解を得る上で重要な契機となる。

(3) イタリア語イタリア文学関連の授業について

まず語学面では、現代イタリア語の運用能力をしっかりと身につけてもらうため、読解力のみならず、作文、会話の訓練も十分行なわれるよう意を用いている。これは、現代イタリア語の確実な知識なくして実りある文学研究も語学研究もなしえないからである。幸い、2007年度から教養学部文

科三類の第2外国語にイタリア語初修クラスが設置され、その後、これが他の科類にも及ぶなど、教養学部におけるイタリア語学習の環境が以前に比べ質量とも改善されつつあるが、文学部進学以降もイタリア語の十分な語学的トレーニングが続けられるよう、カリキュラム編成に配慮を加えている。

文学面では、限られた授業時間の中で、中世から現代に至る各文学ジャンルの代表的作家、作品になるべく広く接することができるようカリキュラムに工夫をこらし、とりわけ、イタリア文学の古典に親しむ機会が多く得られるよう配慮している。学部在籍中の2年間に、ダンテの『神曲』、ペトラルカの『カンツォニエーレ』、ボッカッチョの『デカメロン』に必ず原典で接することのできる授業を設けているのは、そうした意図に基づくものである。幸い、上述したように、イタリア語の場合、標準文語の骨格が14世紀に形成されたという事情があるため、現代語の確実な知識があれば、古今の主要作品を読みこなすのはさほど困難なことではない。

(4) 南欧文学科の教員および担当授業について

浦一章教授は、ダンテおよびその周囲の詩人たちを中心に研究を行っている。授業では、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョら14世紀作家に加えて、その他の作家研究、イタリア文学史、中世オック語文法、トゥルバドゥール文学などを扱う。駒場キャンパスでも、イタリア語やイタリア現代文学を講読する形の科目を担当することがある。

ロレンツォ・アマート准教授は、ルネサンス期イタリア文学とフィンランド語フィンランド文学を専門とする新進の研究者で、これまで、母校のフィレンツェ大学やフィンランドの大学で教えた経験をもつ。文学部の授業ではイタリア語を用い、主として近現代のイタリア文学（散文、韻文）を扱う。そのほか、イタリア語初心者を対象にした入門的な授業も担当するので、本専修課程以外の学生を含め、イタリア語に興味のある学生は是非、参加してほしい。

以上のほか、毎年、数人の非常勤講師による特殊講義が開講されている。これまでに、高田和文講師（静岡文化芸術大学）がイタリア演劇、伊藤博明講師（埼玉大学）がルネサンス思想および美術、武谷なおみ講師（元大阪芸術大学）、堤康徳講師（上智大学）がイタリア現代文学、アルダ・ナンニーニ講師（国立音楽大学）がイタリア語作文の授業を受けもち、清水

憲男講師（早稲田大学）や本田誠二講師（神田外語大学）がスペイン語散文作品講読の授業を担当してきた。

（5）南欧文学科への進学を考えている人へ

まず何より、教養学部で開講されているイタリア語の授業（イタリア語初修クラス以外の学生は、第3外国語初級・中級その他イタリア語関連の授業）を履修することを強く希望したい。前述したように、本専修課程を卒業するためには、イタリア語の知識が不可欠だからである。本人の意欲次第では、イタリア語未修で進学した場合でも、本専修課程を2年で卒業することが可能だが、やはり相当の覚悟が必要だろう（なお文学部全体の外国語科目として、初級および中級のイタリア語の授業は毎年開講されている）。また、スペイン語やフランス語など、姉妹語の学習も勧めたい。余力があれば、ラテン語の履修も行なってきてほしい（とくに、古い時代のイタリア文学に関心がある場合には）。これら姉妹語やラテン語の学習は、本郷に進学した後も積極的に取り組むことを望みたい。

本郷での学生生活だが、小規模な本専修課程にあっては、院生を含めて全学生が互いに顔見知り。院生のほか、他学科・他学部からの受講生を加えても、授業のほとんどが少人数クラスであり、密度の高い教育指導が可能な体制になっている。この恵まれた環境をどう生かすかは、言うまでもなく、学生一人一人の意欲にかかっている。